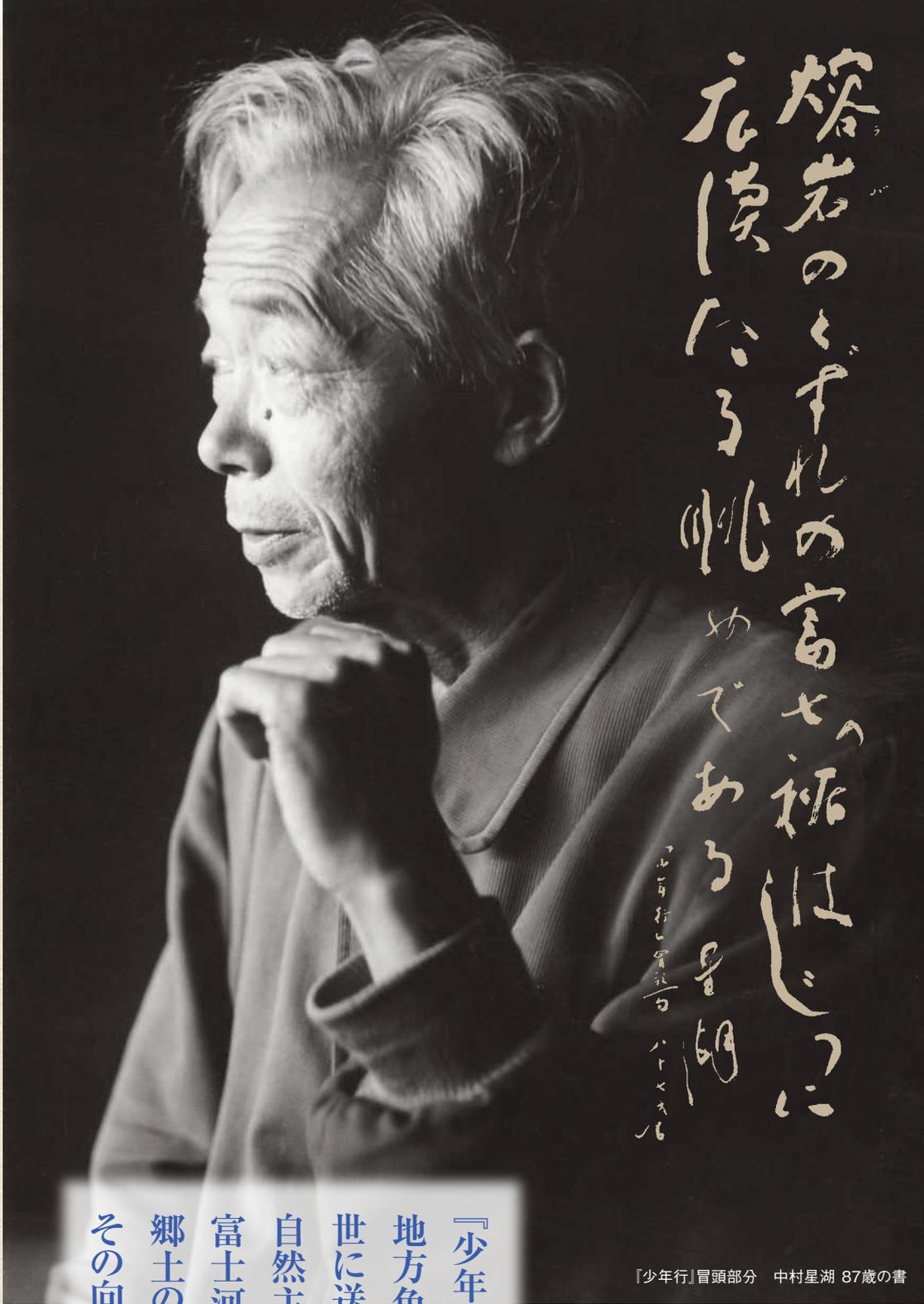


中村星湖

1884-
1974

熔岩のくずれの富七、裾はじつに
元懐なる眺めである星湖

少年行の冒頭部分 中村星湖 87歳の書



『少年行』をはじめ、
地方色豊かで質朴な作品を
世に送り出し、
自然主義作家として名をはせた
富士河口湖町出身の星湖。
郷土の文化を深く見つめ直し、
その向上にも尽力した。

『少年行』冒頭部分 中村星湖 87歳の書



『少年行』が一等入選 文壇デビューを飾る

中村星湖は1884(明治17)年、南都留郡河口村(現・富士河口湖町)に父・栄次郎、母・ためめの長男として生まれた。本名は將爲(まさため)。中村家は代々、富士講の御師(おし)。学間に熱心だった父母の影響で、星湖も早くから文学に親しんだ。地元の河口尋常高等小学校を卒業後は山梨県尋常中学校(現・甲府一高)に入学。雑誌・中学世界や中学文壇などへ文章や漢詩を投稿し、発表した。

1904(明治37)年、早稲田大学文学科に進んだ星湖は、坪内逍遙(つぼうちしやうよう)や島村抱月(しまむらほうげつ)など自然主義文学の先駆者に師事しながら、旺盛な執筆活動を続ける。1906(明治39)年には雑誌・新小説の懸賞で『盲巡礼』が一等入選。さ



若き日の中村星湖

らにその夏に執筆した、郷里・富士山麓の自然を舞台に2人の少年の友情と成長を描いた『少年行』が翌年、抱月や二葉亭四迷(ふたばていしめい)の絶賛を受け、早稲田文学・懸賞長編小説の一等に入選した。早稲田文学は当時、自然主義文学の拠点として明治文壇で大きな比重を占めていた。『少年行』で星湖は一躍文壇の注目を集めることとなった。

短編で星湖文学を確立 『ボヴァリー夫人』の翻訳も

大学卒業後は早稲田文学の記者となり書評などを担当する一方、『半生』『漂泊』『女のなか』などの短編集を刊行。身近な事象に基づく作品を発表し、星湖文学を確立していった。

明治末期から大正になるとヨーロッパ文学を中心に翻訳も行い、1916(大正5)年にはフローベール作『ボヴァリー夫人』を翻訳刊行した。



茅ヶ崎の南湖院に国木田独歩を見舞う。前列中央が中村星湖。その後ろが国木田独歩、写真左端が前田晃、同列右端が田山花袋。星湖の左上が正宗白鳥

郷土の文化と深く向き合い 地域文化の振興に尽力

40歳を過ぎると、星湖の心は郷土へと向いていく。1926(大正15)年に山梨日日新聞・文芸欄の小説の選者となり、また前田晃(あき)らと山梨県文化人の懇談会・山人会を発足。以後、郷土文化の振興に努め、1940(昭和15)年

には富士五湖地方文化協会を結成し、機関誌『五湖文化』を編集した。

1945(昭和20)年、戦火を避けて郷里の河口村に疎開。以後約30年間、村の教育委員長を務めたほか、村の人を集めては俳句を指導したり、県下の小中学校の校歌の作詞も多数手掛けるなど、積極的に地域文化の発展に尽力した。また、1951(昭和26)年からは山梨学院短期大学で教授を務め、1956(昭和31)年には県文化功労賞を受賞。その際「今後も老骨を地方文化の振興に役立てていきたい」と語ったという。

郷土に多くの文化の足跡を残した星湖は、1974(昭和49)年4月13日、90歳で生涯を閉じた。1987(昭和62)年に山梨の文化振興を目的に中村星湖文学賞が制定され、その精神は今もしっかりと息づいている。



世界文化遺産登録を目指す富士山。その麓で生まれ育った星湖。『少年行』などの作品からは富士山の魅力が素直に伝わってきます。文学者・星湖の足跡は県立文学館・常設展で見ることができます。



中村星湖コーナー(常設展内)

県立文学館

甲府市貢川1-5-35 TEL 055-235-8080